

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人 京都市音楽芸術文化振興財団	
施 設 名	京都コンサートホール	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	28,261	(千円)
公演事業	20,300	(千円)
人材養成事業	2,978	(千円)
普及啓発事業	4,983	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	京響スーパーコンサート 「ミッシャ・マイルスキー× 京都市交響楽団」	2018年9月5日(水)	演目：ドヴォルザーク チェロ協奏 曲 口短調 op.104 ほか 主な出演者：M・マイルスキー、広上 淳一、京都市交響楽団	目標値	1,300
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	1,316
2	第22回京都の秋 音楽祭 開会記念コンサート	2018年9月16日(日)	演目：ショスタコーヴィチ 交響曲 第12番 ニ短調 op.112 ほか 主な出演者：京都市交響楽団、井上 道義	目標値	1,500
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	1,653
3	NDRエルプフィルハーモ ニー管弦楽団	2018年11月1日(木)	演目：ブラームス 交響曲第4番 ホ 短調 op.98 ほか 主な出演者：NDRエルプフィルハー モニー管弦楽団 ほか	目標値	1,350
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	988
4	パリ木の十字架少年合唱 団	2018年12月1日(土)	演目：カッチーニ アヴェ・マリア モーツァルト 子守唄 ほか 主な出演者：パリ木の十字架少年合 唱団 ほか	目標値	1,400
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	911
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	5,550
				実績値	4,868

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	第8回 関西の音楽大学 オーケストラ・フェス ティバル in 京都コン サートホール	2018年9月24日 (月)	演目：マーラー 交響曲第5番 ほか 主な出演者：秋山和慶、関西の音楽 大学8校 ほか	目標値	1,000
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	1,221
2	第14回 京都市ジュニア オーケストラコンサート	2019年1月27日 (日)	演目：サン=サーンス 交響曲第3番 ハ短調「オルガン付き」ほか 主な出演者：広上淳一、京都市ジュ ニアオーケストラ ほか	目標値	1,300
		京都コンサートホール大 ホール		実績値	1,427
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	2,300
				実績値	2,648

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	田隅靖子館長の「おんがくア・ラ・カルト」第26回	2018年6月26日(火)	演目：ラヴェル ヴァイオリン・ソナタ(遺作)ほか 主な出演者：弓新 ほか	目標値	500
		アンサンブルホールムラタ		実績値	471
2	田隅靖子館長の「おんがくア・ラ・カルト」第27回	2018年8月10日(金)	演目：リスト メフィスト・ワルツほか 主な出演者：萬谷衣里	目標値	500
		アンサンブルホールムラタ		実績値	441
3	田隅靖子館長の「おんがくア・ラ・カルト」第28回	2018年11月29日(木)	演目：ガーシュイン ラプソディー・イン・ブルー ほか 主な出演者：上田じん ほか	目標値	500
		アンサンブルホールムラタ		実績値	471
4	田隅靖子館長の「おんがくア・ラ・カルト」第29回	2019年2月9日(金)	演目：ラモー 優しい嘆き ほか 主な出演者：生水敬一郎	目標値	500
		アンサンブルホールムラタ		実績値	482
5	あけてみよう！“音楽のトビラ”	2018年7月26日(木)	演目：リスト 愛の夢第3番ほか 主な出演者：吉野直子、宮田まゆみ	目標値	350
		アンサンブルホールムラタ		実績値	306
6	光と色彩の作曲家クロード・ドビュッシー第1回	2018年10月13日(土)	演目：《小組曲》より〈小舟にて〉ほか 主な出演者：小坂圭太、中川俊郎、岡田暁生	目標値	350
		アンサンブルホールムラタ		実績値	458
7	光と色彩の作曲家クロード・ドビュッシー第2回	2018年11月10日(土)	演目：イベール 2つの間奏曲 ほか 主な出演者：大嶋義実 ほか	目標値	350
		アンサンブルホールムラタ		実績値	459
8	光と色彩の作曲家クロード・ドビュッシー第3回	2018年11月23日(金)	演目：ドビュッシー 前奏曲集 第1集・第2集(全曲) 主な出演者：P・ロジェ	目標値	400
		アンサンブルホールムラタ		実績値	471
9	幼児のためのポジティブオルガン講座	2018年6月12,13日	演目：オリジナル・プログラム 主な出演者：久保田真矢	目標値	120
		アンサンブルホールムラタ		実績値	108
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	3,570
				実績値	3,667

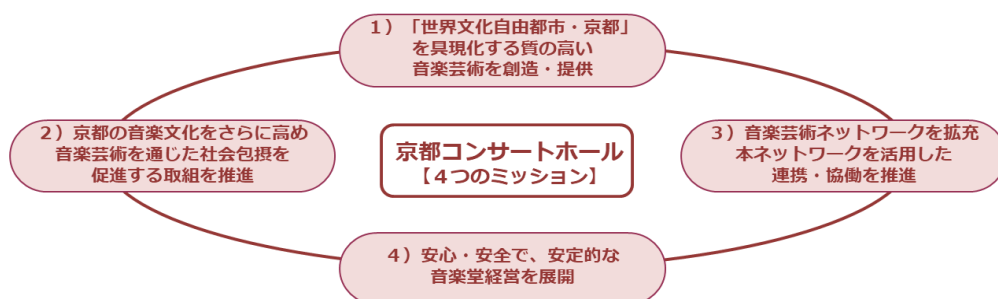
【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

当ホールは京都における「クラシック音楽の殿堂」〔資料1〕として、中期経営計画を立て〔資料2〕、下図に記載のある4点を社会的役割として掲げた。そして、平成29年度に収集した聴衆からのアンケート結果〔資料3〕からニーズを抽出し、社会的役割とニーズを精査した上で平成30年度の事業方針を「①クラシック音楽の殿堂としての質の高い演奏会の提供」、 「②地域に根ざしたプログラムの展開」、 「③次世代へつなげる人材の育成」とした。平成30年度はこの事業方針に沿って、公演事業（方針①）、人材養成事業（②及び③）、普及啓発事業（②及び③）を組み立て、当初の予定通りに事業を進めた。平成30年度のアンケート結果〔資料4〕や事業報告書〔資料5, 6〕からも、社会的役割と地域のニーズに沿った事業を展開出来たことが分かる。

ただ、社会的役割の一つ「音楽芸術を通じた社会包摂を促進する」ことに関しては未だ積極的に事業推進することが出来ておらず、今後の当ホールにおける最重要課題として挙げられるだろう。今後においては、この点の強化に励んでいきたい。



助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

京都市交響楽団のフランチャイズホールである当ホールにとって、楽団との一体的な事業展開を図ることは重要なミッションの一つであり〔資料1〕、施設の強みでもある。そのため、開館当時より連携事業を継続的に行ってきた。平成30年度においては、京都市交響楽団との連携事業を2公演開催したことにより、ホールとしての文化的・社会的意義を提示した。

また、当ホールの特色を提示するため、当該年度はホール独自の自主企画を立案し、他館では鑑賞することの出来ない京都ならではの公演を打ち出した〔資料7〕。この事業は聴衆から多大な支持を得ることが出来た上に、継続的な開催を希望する声も数多く届いた〔資料4〕。これらの実績を考慮すると、当該年度の事業は助成に値するものであったと考える。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

公演・人材養成・普及啓発各事業共に、ホールの社会的役割やニーズに基づいて目標を設定した。公演事業に関しては、指標4点のうち、3点を達成することが出来た〔資料8, 9〕。平成30年度は観光客の絶えない京都として、様々な聴衆層にお越しいただくため、インバウンド誘致を目的として多言語チラシ制作に取り組んだ〔資料10, 11〕。英語版サイトを介したチケット購入者数からは〔資料12〕指標を達成することが出来なかったが、昨年度実績よりも平均0.5名アップしているため、新たな取り組みの効果はあったと考えられる。

人材養成事業に関しては、定性的内容を含む指標を加味して目標達成度を図った。結果、助成を受けた2事業について、目標として掲げた3点（①次世代の人材育成に繋がる事業であること〔資料13〕、②ホールが若手音楽家たちの活動・発信拠点になること〔資料14〕、③彼らの活動で地域活性化を目指すこと〔資料14〕）の達成を確認することが出来た。

普及啓発事業に関しても、定性的内容を含む指標で目標達成度を図った。目標の一つとして、「新たな聴衆層の開拓」を掲げていたが、30歳以下の聴衆を対象にした割引チケット「U-30」券をあらたに導入することにより〔資料15〕、通常公演よりも数多くの若年層が来館した。

また、これらの目標・指標内容を反映した「事業評価シート」を、事業毎に作成した〔資料16〕。助成終了後もこのシートを見返すことにより、今後の事業展開に活かせるような工夫を行った。

しかしながら、全体的に、数値で測ることのできる定量的指標に頼ってしまった。特にこの傾向は、公演事業に関して顕著にみられる。数値で測ることが困難な分野であるからこそ、次回は定性的な指標も同時に設定することで、より詳細な目標達成状況を分析・提示する必要があると考える。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

公演・人材養成・普及啓発の各事業において、昨年度中に企画書を作成し〔資料17〕、事業内容及び経費の両面において計画通り進めるように努めた。その結果、すべての事業において、当初の計画通り進めることが出来た。よって、適切な事業期間で企画制作・運営管理が出来ていたと考えられる。これらの事柄については、各事業で「評価シート」を作成し〔資料16〕、事業の進行状況や実施結果について常にチェック出来る体制を整えた。

事業費に関しては、収支表〔資料18〕にあるように、ほぼ全ての事業において当初の予定通りに制作を進めることが出来た。特に公演事業である「京都の秋音楽祭開会記念コンサート」や人材養成事業の「京都市ジュニアオーケストラコンサート」、普及啓発事業の「光と色彩の作曲家 クロード・ドビュッシー」等は予算時より収支差額が好転し、かつ入場者数も目標値を上回ったため、アウトプットに対して事業費を適切に執行することが出来た。

しかしながら、公演事業の「NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団」や「パリ木の十字架少年合唱団」に関しては、支出は当初の計画通りに進めることが出来たが、広報に力を入れたにもかかわらず様々な要因で券売に苦勞したため、収入については予算時よりも減となった。今回はこのような結果となったが、一方では京都における「クラシック音楽の殿堂」として、今後も海外オーケストラ公演をはじめとする海外招聘公演の実施が各方面から求められている。ニーズや予算、事業内容等を考慮し、次年度以降の企画立案に反映させながら、特に公演事業については事業内容や事業費が適切かどうか、よく見極めて実施していきたい。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当ホールの事業内容は、主に事業企画課長および係長が責任を持ち、ホールの社会的役割やニーズ等を考慮しながら企画・立案した。また、当ホールが持つ、地域の文化拠点としての機能を強化するために、事業に関連する活動を地道に行ってきた。平成30年度における主な実績は次の通りである。①音楽雑誌への取材協力 [資料19]、②Web批評誌への寄稿（ホール・事業紹介） [資料20]、③地域の文化施設との連携（公開講座の開催や広報連携） [資料21, 22]、④地域企業との事業連携 [資料23]、⑤地域の社会福祉団体でのスピーチ [資料24]、⑥地域の大学における講座開催 [資料25]、⑦当ホールが発行するコンサートガイドへの寄稿 [資料26]。

さらに、現役ピアニストである当ホール館長も、ピアノ・リサイタルをはじめ [資料27]、ホール主催事業の司会を務める等 [資料28]、「ホールの象徴」としての役割を果たすと共に、音楽を通してホールと地域住民を繋いできた。

フランチャイズ・オーケストラである京都市交響楽団においても、第46回サントリー音楽賞を受賞したことからも明らかであるように、現在その演奏は高く評価されており、活動の幅も年々多彩になってきている [資料29]。

以上の人的・物的資源を元に、公演・人材養成・普及啓発の各事業を実施した。

海外オーケストラ公演や京都市交響楽団を使った公演事業は、いずれも当ホールに求められる「京都におけるクラシック音楽の殿堂」としてあるべき姿を示す事業であり、市民が気軽に高水準の文化芸術を享受することの出来るホールづくりを意識して企画した。その結果、市内のみならず様々な地域からの来場者が認められ、高評価を得ることが出来た [資料4]。

人材養成事業では、若手音楽家育成を最優先にしながらも、採択された2公演でロビーコンサートを取り入れる等、「公共ホール」として彼らと地域住民とを音楽で繋ぐことを心がけた。

普及啓発事業においては、音楽の素晴らしさをあらゆる市民が享受出来るよう、チケット代や公演内容に多様性を持たせた。また、平成30年度に新しく企画した3公演シリーズでは、ナビゲーターに音楽学者を据えることにより、他館にはない新たな視点を組み込むことが出来た。さらにこの同シリーズでは、地域の文化施設や企業と連携して [資料21, 23]、これまでにない取組にも挑戦することが出来た。

以上の理由から、平成30年度の事業に関して、地域の文化拠点としての機能をじゅうぶんに発揮出来る事業であったことが認められる。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

当ホールでは、ステークホルダーからの期待やニーズを調査するために、公演毎にアンケート調査を行った〔資料4〕。このアンケートでは、聴衆の満足度を測ると同時に、次回公演に期待する内容を実際に記載してもらい、収集した情報を次年度の事業企画に活かすよう心がけた。

また、当ホールでは賛助会員制度を設けており、会員に対して月1度の情報誌〔資料30〕を送付するほか、リハーサル見学やバックステージツアー、懇談会等〔資料31〕を実施した。その結果、会員とホール職員の交流及びコミュニケーションの場を創出することが出来た。

さらに、当ホールの事業に関して、WebサイトやSNS等を通して情報発信を頻繁に行い、ステークホルダーに対して幅広く周知するよう努めた。ウェブサイトの見やすさ・情報収集のしやすさに関しては常に注意を払っており、平成29年度には多言語対応を含む大掛かりなサイト改修を行った〔資料32〕。平成30年度の来館者が前年度よりも増加した理由の一つとして〔資料33〕、このサイト改修が挙げられると思われる。

平成30年度は、通常の事業企画に加えて、1階エントランスホールで無料公演や特別イベントを実施する機会に恵まれた〔資料34、35〕。この試みによって近隣から非常に数多くの住民が来館し、賑わい創出一役を買ったほか、地域住民の文化芸術に対する関心を高めることが出来た。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

当ホールでは事業毎に「企画書」を作成し〔資料17〕、その計画に沿って事業を進めることを心がけた。事業終了後は収集したアンケートや収支決算を精査し、それらのデータを落とし込んだ「評価シート」を作成した〔資料16〕。この評価シートを元に事業企画課内で議論を重ね、反省点を次年度以降に活かせるようにした。平成30年度で特に反省すべき点は、公演事業で広報活動を充実させることが出来なかったことである。次回は広報に多様性を持たせ、集客や券売に結びつけたい。

また、事業運営だけではなく組織活動全般において中長期的な視点に立った経営を推進していくため、指定管理者である当財団は「中期経営計画2021」を策定した〔資料2〕。この計画は市や当財団を取り巻く環境の変化に対応しており、当ホールにおける今後4年間の展望や重点取組課題をはじめ、当財団の経営方針から組織運営計画（人事戦略を含む）、財務運営計画等に言及している。その中でも、営業活動や助成金・協賛金・指定管理料の確保〔資料36〕、賛助会員の獲得〔資料37〕、職員向けの研修会〔資料38〕等に力を入れることで、より一層の発展を目指している。

さらに当ホールでは、日本の同規模ホール6館によるコンサートホール企画連絡会議や大都市連絡会議等に参加しており、ホール間のネットワークの形成と強化に努めている。

教育機関とのネットワーク形成に関しても強化を図っており、前年度に引き続き4大学からインターシップを受け入れ、将来に向けた人材養成に努めた〔資料39, 40〕。また、関西の音大・芸大8校が当ホールに集結する「関西の音楽大学オーケストラ・フェスティバル」も8回を迎え、“若手音楽家を育成するプラットフォーム”としての役割を継続的に果たしている。その他、京都市立芸大美術学部との連携事業等〔資料41〕、官学連携も進めており、公共ホールが果たすべき役割を強化している。